

『文化財と技術』

第10号

第一部 美術と技術の歴史

- 山中 理 美術史と金属工芸
 —唐時代銀器「鍍金狩獵文六花形銀杯」の周りを廻って—
- 金 跳 咏 原三国～三国時代における鉄製刀剣の製作技術とその意味
- 吉田秀享 鍛冶作業場の推定 —二例の古代鍛冶炉から—
- 上 梶 武 日本古代の鉄鑄造と素材鉄
- 鈴木 勉 韓半島の鑄造技術と毛彫り技術から藤ノ木馬具・法隆寺へ
- 金 跳 咏 三国時代における鉄鐸の副葬と性格
- 平林大樹 根挟みを用いた後期・終末期古墳副葬矢の構造
- 姜 旼 廷 益山・笠店里古墳出土金銅飾履の復元製作研究

第二部 象嵌研究

- 鈴木 勉・金 跳 咏 威安末伊山5号墳出土象嵌鉄刀の線彫り技術
 —線彫り技術判定の基準試料の提示—
- 瀧瀬芳之 日本列島内出土象嵌遺物集成2
 —刀剣・銚・刀子編（補遺・追加）及び馬具・鏡 他編—

第三部 金石文研究

- 福井卓造 七支刀銘の「為倭王旨造」について
- 鈴木 勉 漧の技術・石刻の技術
- 鈴木 勉 會津八一先生筆色紙「心」について

第四部 復元研究

- <宮地嶽古墳出土大型頭椎大刀の復元研究>
- 鈴木 勉 復元の企画
- 鈴木 勉 復元のための調査と推定
- 藤安将平 （作刀補助：有賀一久・中西裕也 記録：金 跳 咏）
 刀身の復元
- 藤安将平 （記録：金 跳 咏）
 木製鞘の復元
- 藤安将平 （記録：金 跳 咏）
 木製柄の復元
- 山田 琢 金銅装の復元
- 鈴木 勉 鑄造鈴の復元

七支刀銘の「為倭王旨造」について

福井 卓造

1. 七支刀復元研究に参加して

奈良の石上神宮に伝わる七支刀は、神功紀に見えるところの、百済から贈られた七枝刀であるとされ、国宝中の国宝として有名なものである。その銘文の判読は、象嵌の脱落や錆、傷等により困難な部分が多く、謎に満ちたものとして幾多の論議を呼んできた。しかし最近では多くの先学の研究や、エックス線写真の成果により、かなり大意は掴めるようになってきたとされる。そうした中、今回筆者は工芸文化研究所の一員として七支刀復元研究に参加する機会を得、その製作技法の非常に困難さや象嵌銘の特徴について知ったことは、大変有意義であった。そうまでして百済がこのような珍奇な刀を作らねばならなかった理由とは何であろうか。一言でいえば、これは百済が国の威信をかけ、外交戦略的意味を込めて倭に贈った物なのだ。そうした視点でこの銘文を改めて読み直してみると、新たに気付くこともあるかも知れない。またそうした百済側の思惑に対し、日本書紀ではそれをどう捉えているであろうか。その対比も興味深い。なお今回関係諸機関から貸与されたエックス線写真や、コンピュータ解析により、象嵌線か傷かの判別に詳しい彫金の専門家の意見を参考に、現時点で最善と思われる釈文を確定したのも大きな成果である。これらの成果に基づき、筆者としては、従来なされている銘文解釈のうち裏面、特に「為倭王旨造」の部分の理解について疑問を感じているので、その点につき新案を示してみたい。

2. 銘文

銘文の判読は研究者によって差異があり様々であるが、今回現時点で確定しようと判断した釈文は次のようであった。

(表銘) 泰和四年十一月十六日丙午正陽造百練鍔七支刀□辟百兵宜供侯王□□□□作

(裏銘) 先世以来未有此刃百済王世□奇生聖音故為倭王旨造傳示後世

3. 解釈

(1) 表銘の解釈

「泰和四年」東晋の太和四年（三六九年）を指すというのが福山敏男¹以来の通説である。日本書紀によれば神功撰政四九年（書紀紀年で二四九年、一二〇年加える修正紀年で三六九年）に日本は百済に協力して新羅を破り、加羅七国を平定したということがあるから、その戦勝記念に七支刀が造られたのではないかと考えられるからである。第2字がよく見えないため「泰初」（星野恒²）、「泰始」（菅政友³）などと読む説もあるが、第2字はかすかに禾扁のような跡が見えるのであるし、今のところ特に通説を否定しなければならない理由は無いようである。「太和」を「泰和」と書いた例があるということは、栗原朋信⁴が、南北朝、宋の劉義慶編『世説新語』の注に見える『晋陽秋』

1 福山敏男 1971 「石上神宮の七支刀」 上田正昭編『日本文化の起源』2 平凡社

2 星野恒 1892 「七枝刀考」『史学雑誌』第三編第三十七号

3 菅政友 1907 「大和国石上神宮宝庫所蔵七支刀」『菅政友全集』国書刊行会

4 栗原朋信 1971 「七支刀銘文についての一解釈」 上田正昭編『日本文化の起源』2 平凡社

逸文や唐の徐堅編『初学記』の注に見える『晋起居注』逸文、及び唐の魏徵ら編『隋書』『経籍誌』に見出している。また百済が東晋の年号を用いたのも、別に不自然ではない。吉田晶⁵は唐の張楚金編『翰苑』及びその注に引く『括地誌』の記述から、百済には宋元嘉曆（四四三年成立）以前は干支年だけで、年号制がなかったのは確実とする。対外的に通用する適当な年号制が無かった百済が東晋の年号を使用することで自国の背後に大国である東晋の存在を匂わせれば、それだけ自国の威光を増すことができるというものである。ただし栗原朋信の東晋指示説（七支刀は東晋の指示で百済が作った）については、そのような事実はいかなる国の史書にも見えず、今のところ信じ難い。

「十一月十六日丙午正陽」後漢の王充の『論衡⁶』率性第八に「陽燧取火於天 五月丙午日中之時 消鍊五石 鑄以為器 磨斫生光 仰以向日 則火來至 此真取火之道也」（陽燧もて火を天より取るに、五月丙午の日中するの時、五石を消鍊し、鑄て以って器と為し磨斫して光を生ぜしめ、仰いで以って日に向かえば、則ち火來たり至る、此れ真に火を取るの道なり）とあるように、中国では陽燧思想に基く金属器製作の伝統的吉祥句として「五月丙午」という語があり、鏡銘や刀銘に見ることができる。「正陽」は正午と同じ（宮崎市定⁷）。ここでは少し変わっていて、十一月十六日丙午としてあるのは製作地が百済である故であろうか。あるいは戦勝記念の国家間の贈り物であるから、不規則な時期の製作となったのか。

「造百練鍊七支刀」百練とは百回ほどもよく精鍊した、ということであろう。「百鍛鍊」とは言っていないのであるから、七支刀が鍛造であることにはならない。むしろ今回の復元研究で判明したのは鑄造の可能性が高いということである。よく精鍊した鉄で七支刀を作ったということであり、百済には鉄及び高い金属加工技術があるということを誇示するものであろう。

「²¹□辟百兵」第21字は横線一本ほどしか判明しない。「生」（木崎愛吉⁸）、「世」（榎本社人⁹）、「出」（佐伯有清¹⁰）、「可」（王仲殊¹¹）などの説がある。他に例えば「帯」字を入れて「帯びれば百兵を辟く」といった文章も考えられよう。

「宜供侯侯王」「宜侯王（侯王に宜し）」という言い方は、鏡銘に頻出し、刀では漢光和七年廣漢金錯書刀¹²に見えている。問題はなぜ間に「供供」と二字入るのかである。宮崎市定は「供を供用の意に解するとしても、それが供供と二字重なっている点が説明しにくい。」とし、佐伯有清は供は恭に通ずるとして、「供供たる侯王（うやうやしい侯王）」という形容詞に解した。だが、贈り物をするときに、相手が「うやうやしい人」であることという条件を付すような事を書くであろうか。また形容詞なら二つ目の供を重字符にしてもよきそうなものである。全体として、この銘文の作者は百済側を誇る記述を巧妙に織り交ぜながらも、決して相手国側（倭）を低めるような言い方はしていないのである。そこでここは、「供（とも）なる侯王に供す」とか「供するに宜しければ侯王に供す」と訓めばよいのではなかろうか。この銘文の作者は「宜侯王」という従来の例文通りにしか漢文を書けない人ではない、伝統的表現を踏まえつつも、応用の利く人であると考えられる。

「^{30 31 32 33 34}□□□□作」30～33字は判読できないが、34字が「作」と見られるので、作者名か製作地名

5 吉田晶 2001 『七支刀の謎を解く—四世紀後半の百済と倭—』 新日本出版社

6 『論衡』和刻本諸子大成七 汲古書院 1976年

7 宮崎市定 1983 『謎の七支刀』中央公論社

8 木崎愛吉 1921 『大日本金石史』好尚会出版部

9 榎本社人 1971 「七支刀銘文再考」上田正昭編『日本文化の起源』2 平凡社

10 佐伯有清 1977 『七支刀と広開土王碑』吉川弘文館

11 王仲殊 1992 『中国からみた古代日本』学生社

12 銭存訓 1961 「漢代書刀考」『慶祝董作賓先生六十五歳論文集 下冊』中央研究院歴史語言研究所

でも書いてあったのであろうか。高口啓三¹³は中国では尚方という王室用鑄銅工房があったので、例えば「百済尚方」といった語の入る可能性を指摘している。

(2) 裏銘の解釈

先世以来未有此刃⁸ 裏面第8字は「刃」とする見解が多いが、表面の「刀」字と違い、一本象嵌線が加わっていると判断したので「刃」となる。「刃」には武器という意味がある。例えば漢の劉安(前179～前122)編『淮南子』(汎論訓)に「鑄金而為刃」(金を鑄て刃と為し)とあり、漢の高誘の注に「刃、五刃也、刀劍矛戟矢也」(刃、五刃なり、刀劍矛戟矢なり)とある。七支刀が実際の戦いに役立つとも思えないが、百済側ではこれを武器ととらえていることを示すもので、かつて例のないこのような武器を造りうる技術力を誇るものである。友好国間であるからよいようなものの、武器製造能力を誇るこのような文面は、あまり穏やかなものとは言い難い。そのような銘文を目にした場合、書紀編者ならばどう書くであろうか。神功撰政五一年紀に「玩好珍物 先所未有」とあるのは或いはこの銘文などを参考にしたものではあるまいか。「刃」(兵器)でなく「玩好珍物」と言い換えれば角も立たなくなるというものである。

百済王世¹³ 裏面第13字は横線一本ほどしか見えない。「子」とする見解が多いが藪田嘉一郎¹⁴は「世」とする。文脈上はどちらでも通じるであろう。

奇生聖音 ここは論者により全く異なる読解がなされている。一つの見解は人名説で、「奇生聖音」とは百済王(近肖古王)の世子である「貴須王子」(後の近仇首王)の名であるまいかとする(西田長男¹⁵)。しかし倉西裕子¹⁶が言うように、「須」は呉音で「Xū」、「首」は漢音で上声「Shǒu」呉音で去声「Shòu」なのに対し、「生」は「Shēng」であってみれば、漢字の音韻に通じていると思われるこの銘の作者がこのような表記をするとは考え難いであろう。また文脈上も「奇生聖音」が人名なら、その後に「故為倭王～」と続く、「故」の指し示すものがわからない。「奇生聖音」の部分には倭王のために七支刀が造られた原因を示す文脈が来るのが自然である。

そこで早くから福山敏男などが主張してきたもう一つの見解は依倚説で、「奇」は「寄」または「倚」の略体あるいは音通による借用、「聖音」は『毛詩』の「德音」と似た意で、「音」は声。「奇生聖音」とは、「百済王と太子とは生を御恩に依倚しているが故に」という意味であるとする。おおむね妥当と考えられる。神功撰政紀五十一年に「百済の王の父子、並に類致地みて、啓して曰さく、「貴国の鴻恩、天地よりも重し。何の日何の時に、敢へて忘れまつること有らむ。聖王、上に在りまして、明なること日月の如し」。など」とあるのも、この銘文を参考にしたものか、よく符合するといえよう。

なお村山正雄¹⁷は漢訳仏典で「聖」とは釈迦を意味するとし、「奇生聖音」とは「計らずも釈尊の加護の下に生きて」ということであるとするが、『三国史記』によると、百済への仏教伝来は枕流王元年(三八四年)とされており無理がある。また山尾幸久¹⁸は「聖音」とは道教の教えであり、「奇生聖音」とは百済王が「奇しくも聖音に生く」ということで、倭王にも道教を勧めるため七支刀を送ってきたと見る。百済王が仏教や道教を信じるのは自由であるが、倭王に信仰勧奨するためにこのよ

13 高口啓三 1996 「石上神宮七支刀銘文の解釈」『古代学研究』一三三

14 藪田嘉一郎 1956 「七支刀銘考釈」『日本上古史研究』五四～五五号

15 西田長男 1956 『日本古典の史的研究』理想社

16 倉西裕子 「七支刀」銘文解釈をめぐる一試論—「聖」とは誰か—『東アジアの古代文化』一一七 大和書房

17 村山正雄 1996 「七支刀銘字一考」『石上神宮七支刀銘文図録』吉川弘文館

18 山尾幸久 1981 「七支刀の銘について」『村上四男先生和歌山大学退官記念朝鮮史論文集』開明書院

うな手の込んだ刀を製作する必要があるのではあろうか。そもそも仏教のような最新の学問は、友好国間とはいえ妄りに流出させるようなものではあるまい。

故為倭王旨造 「故為」は前文を受けて、百済王と世子は倭王のありがたい御恩に倚って生きてくることができたので、そのゆえに倭王のために、という文脈である。問題は「倭王旨造」である。「旨造」などという熟語は無い。そのためここでは次のような読み方が従来提起されている。

第一は人名説で、倭王の名が「旨」だというものである。西田長男は「旨」を「替」に改め、これは実は「賛」で、ほめることに通ずるから誉田別（応神天皇）だとするが飛躍がありすぎる。橋本増吉¹⁹は「旨」はオキナガタラシヒメ（神功皇后）の「シ」だとするが、名に「タラシ」の付く天皇はいくらでもいるのであって（孝安、景行、仲哀）これでは区別にならない。栗原朋信は「ササ」と「旨」と音が類似するとして「旨」はイササワケ（応神天皇の幼名）だとするがそれほど音が近いともいえないであろう。菟田俊彦²⁰は「旨」とは天孫本紀に見える尻綱根命の「シ」だとするが、記紀に見えぬこのような倭王がいたのか疑問がある。

第二は上旨説で、「倭王の上旨」のために造った、と解するものである（福山敏男）。だがそれならばきちんと「上旨」というべきで、「上」を省くのは失礼であるし、漢文としても異様に省略しすぎて意味がよくわからない。

第三の見解は修飾語説で、「旨」は「造」にかかる修飾語で、「嘗」の省略と見て「嘗（はじめて）造った」（宮崎市定）としたり、あるいは「旨（うま）く造った」（王仲殊）とする。だが表面から裏面にかけての銘文で、「百練鋏」で造った「先世以来未有」の大変な物であることを示してきた七支刀について、「はじめて」とか「うまく」などという陳腐な形容をここでする必要はあるのか。また国家間の贈り物に記す正式な銘文に「旨造」などという、他に全く見ることでできない（熟語にあらざる）語を使用するものであろうか。鏡銘などの言い回しにも通じているらしいこの作銘者ならば、なぜ鏡銘に頻出する「大好」「大工」「大巧」という語を使わないのか。

筆者としては、従来なされているこの部分の三通りの読み方のいずれにも納得できないものを感じる。何か読み誤りがあるのではなかろうか。

(3) 裏銘解釈の新案

<「造」は「つくる」か>

刀の銘であるから、「造」とあれば「つくる」ことであると当然のごとくこれまで考えられてきた。確かに表面に「造百練鋏七支刀」とある「造」は「つくる」であろう。だがこの表面の「造」と裏面の「造」が同じものであると速断してはならない。そもそも構文が違っていることに気付かなければならない。表面では「造」の後に目的語「百練鉄七支刀」が来ている。正しい漢文である。では裏面はどうか。つくられたのは裏面の文章でいえば「先世以来未有此刃」であるから、これが目的語として「造」の後に来なくてはならないはずである。にもかかわらずなぜこれが先頭に出て、「造」が最後に来るのか。従来の諸見解は、この漢文としての構文の矛盾を日本語としての訓読の工夫によってうまく目立たなくしてきたのである。日本語は省略が多く、あいまいな表現でも何となく通用してしまうからである。それは裏面の銘文を第八字の所で平叙文として一旦終わらせることである。いろいろな組み合わせがありうるが例えば次のようになるであろう。

「先世以来、未だ此の刃有らず。百済王、世□、聖音に生を倚りたるが故に倭王の為、旨く造る。」

19 橋本増吉 1956 『東洋史上より見たる日本上古文研究』 東洋文庫

20 菟田俊彦 1974 「倭王旨の擬定と天孫本紀一七支刀新見一」 『国学院雑誌』 七五一一二

厳密に読めばこの文章が何か不自然な感じがするのは、第一文と第二文にブツ切りにしながら第二文に何を造ったのかという目的語が無いためである。この違和感を解消するには、第八字までを体言とし、以下に続ける必要がある。

「先世以来、未だ有らざる此の刃、百済王、世口、聖音に生を倚りたるが故に倭王の為、旨く造る。」

これならば一つの文章で目的語もあり、正しく読める日本語ではある。つまり裏銘は二文に切るべきでなく一文と見るべきである。だがそれでも先述のように漢文の構文としておかしい。目的語「先世以来未有此刃」は「造」の後に来るべきである。

<「造」は「いたる」である>

右で述べた構文の矛盾が生じた原因は、裏面の「造」を「つくる」と速断したことにある。「造」という字には「いたる」という意味もあることに注意しなければならない。むしろそちらが原義である。例えば『周禮²¹』（地官）司門に、「凡四方之賓客造焉則以告」（凡そ四方の賓客造（いた）れば則ち以て告ぐ）とあり、鄭玄（一二七～二〇〇）の注に「造猶至也」（造はなお至るなり）とある。しからば「先世以来未有此刃」は動詞「造（つくる）」の目的語ではないのであって、述語「造（いたる）」に対応する主語として文頭に来ているのである。書紀によれば七支刀は百済の久氐という使者が持って来たという。だが久氐などという者はこの場合全く主役ではない。主役は七支刀なのだ。筆者が今回の復元研究に参加して、銘文を読み直す上で有意義であったというのはまさにこの点である。現代の名工の腕と科学者の知識をもってしても何度も失敗した大変に困難な仕事なのである。四世紀の百済でこの七支刀を作ったのがどれほど大変なことであったか。またそれゆえに、このような珍刀を従来世話になっている倭の王に進呈することは、済倭の友好の促進でもあり、百済の資源と技術力を誇示することでもあり、百済が中国とのつながりを持つことの呈示でもあり、決して百済を軽視してはならぬということを倭に思い知らせることにつながるのであって、その意味で七支刀ほどすぐれた外交使節は無いのである。下手な外交使節や将軍が行くより、刀剣が行った方がよいという発想は日本古典にも見ることができる。すなわち神武記によれば、天照大神と高木神が、葦原中国で苦戦する神倭伊波禮毘古命を支援しようと思い、建御雷神に対し葦原中国に下れと命じたとき、建御雷神は「僕は降らずとも、専らその国を平けし横刀あれば、この刀を降すべし。」と言って自らは降らなかったのである。威力ある刀が行けば十分なのである。百済王や世子が倭王を表敬訪問せずとも七支刀がやって来れば、それがすべてを語るものなのである。

<「旨」は「詣」である>

右のように考えればこれまで不可解であった「旨造」についても疑問が氷解するであろう。なぜなら「詣造」（まいりいたる）という熟語があるからである。「旨」は「詣」の言偏を省略した省文であったのだ。例えば南北朝の范曄（はんよう、三九八～四四五）著『後漢²²』逸民列伝第七十三（嚴光）に「公聞先生至、區區欲即詣造、迫於典司、是以不獲」（公は先生至ると聞き、区区として即（ただ）ちに詣（まい）り造（いた）らんと欲せしも、典司に迫られ、是（ここ）を以て獲（え）ず。（吉川忠夫訳）とある。また呉の支謙訳『撰集百緣経²³』餓鬼品第五、富那奇墮餓鬼縁（富那奇（ふなき）、餓鬼に墮するの縁）に「時辟支佛。即便往詣造長者家。乞甘蔗汁。」（時に辟支佛（びやくしぶつ）、即便（すなは）ち往（ゆ）きて長者の家に詣（まい）り造（いた）り、甘蔗汁を乞う）とある。すなわち「詣造」とは貴人のもとへ参上するといった意味の謙讓語であり、礼を尽くした言い方であ

21 『周禮〔鄭氏注〕』 新華書店 1992

22 『後漢書』第九冊 列伝七 岩波書店 2005

23 『撰集百緣経』（『大正新脩大藏経』第四卷本縁部下 大正新脩大藏経刊工会、1924

るといえる。

四 七支刀銘の文章としての特徴

最後に、短い文章なので傾向を掴むのは難しいのであるが、七支刀銘の文章としての特徴についてまとめると次のようなことがいえるのではないかと思う。

①音韻性

音符を重視し、意符たる扁は省略しても構わないという姿勢。書紀が「枝」とするのに銘文は「支」とし、「避」でなく「辟」、「倚」でなく「奇」とする。また「傳」の「寸」のみ省略するという独創的な省略もある。この傾向からすれば「旨」が「詣」である可能性も高いのではあるまいか。このような傾向は、銘文の作者が日本人でなく、漢字を音でとらえる大陸系の人物であることを示しているであろう。

②独創性

百済製のはずの七支刀に東晋の年号を入れる、それも普通「太和」と書くところ「泰和」と書いた。普通「宜侯王」となるところ、「宜供供侯王」とした。「奇生聖音」は人名ではないかという説さえ主張されるほどの、日本人には思い付かない表現である。「傳」の「寸」だけ省略するのも変わっている。これらの傾向から銘文の作者が日本人ではないことは確実と思われ、漢字の音韻をよく知り、自在に大胆な省文や構文を持ち出せる中国出身者でないかと思われる。

③優越性と謙讓性の混在

泰和（太和）として背後に東晋の存在を匂わせること、丙午正陽造という伝統的な中国の鉄器製造上の慣用句を踏まえていること、百練鉄は高度な精錬を経た鉄であり、日本が欲しがっている物、百兵を避くとはその威力の誇示、先世以来未有此刃は、このような変わった武器を造ることができるということの誇示、伝示後世とはこのような凄い物を百済が贈ってきたことを後世に伝えよという自負の現れ、以上のように全体としてこの銘文には百済の自負、誇りが随所に窺えるのであるが、だからといって決して日本に対して非礼にならないよう、丁寧、謙讓の物言いもしている。すなわち「宜供供侯王」は見下した言い方だという人もいるが、むしろそのような最新鋭で威力絶大の武器を宜しく差し上げるということは、極めて友好的で信頼関係があることを示すもので、丁寧な言い方なのではないかと考えられようし、「百済王世口倚生聖音」は百済人民が知ったら怒りかねないほどのへりくだった表現である。もし「旨造」が私案の通り「詣造」であればこれも謙讓表現である。七支刀銘がこのような両面性を有しているのは、とりもなおさずそれが日本側に百済の底力を思い知らせつつ、日本側の気分を損ねないで友好協力関係を結ぶという外交戦略的表現の産物であることを示している。

五 おわりに

七支刀銘と神功紀の記述は極めてよく符合し、もしそれが偶然の一致にあらざる時は、どちらかが他方を参照して書かれているのではないかと思われるほどである。その成立順序が七支刀銘→神功紀であるのが正常な事象であるが、最近では金廷鶴²⁴のように神功紀→七支刀銘の成立順序で、七支刀は後世の偽作だとする説もある。しかるに右で検討したように、両者は似ているように見えても、七支刀銘の作者は漢字を音で捉える傾向があり、書紀の作者には思い付き得なかったような

24 金廷鶴 1981『百済と倭国』 六興出版

漢文の言い回しもできるので倭人でないと思われ、漢字・漢文を自在に操れる中国出身者と考えられる。そしてその文章は百済の自負、誇りを基本としながらも、対新羅との関係で重要な戦略的パートナーとなる日本の機嫌を損ねないよう巧みに丁寧、謙譲の表現も織り込んであるのである。その倭にとって気分の良い部分の趣旨を大きく取り上げて強調し、対新羅戦への協力に感謝した百済が御礼に珍刀を造って神功皇后へ献上しに来たという物語を構成したのが神功紀の文章であると考えられる。例えば「伝示後世」についていえば、七支刀銘では「百済が造ったこの凄い刀を後世に伝えよ」という趣旨で言っているようであるが、書紀ではむしろ神功皇后が、自分が死んだ後も百済に恩恵を与えよと言い、百済王は百済王で孫に末永く倭へ朝貢しなさいと言ったという、倭済両国間の「倚生聖音」の関係を後世に伝えよ、という意味に受け取って作文したかの表現が見える。神功紀の述作者は森博達²⁵の言うように山田史三方であるのかどうかはともかくとして、神功紀が書紀β群に属し、日本人が述作したと言われているのは今日ではほぼ動かないであろう。七支刀銘が極めて古体の、それでいて中国的な完成美とは違う漢字を用い、漢字を音で捉えた漢文で書かれ、内容的には百済の先進性を誇りつつ、倭の機嫌も害さないという高度な外交戦略的文章であることからすれば、これはまさに四世紀百済人の作と考えられ、他方神功紀の文章は、日本人が、七支刀銘の文章を参考にしつつも、百済の優越性を誇るような部分は割愛し、すべて日本側にとって耳に心地良い物語に構成したものと思われ、これは八世紀日本人の作と見て良い、つまり七支刀→神功紀の順に成立したものと見るのが最も自然なのであって、文章の上からも七支刀は真物として良いと思われる。最後に私案による解説を示しておく。

(表銘) 泰和四年十一月十六日丙午正陽、百練鋏の七支刀を造る。帯びれば百兵を避く。供するに宜ろしければ侯王に供す。□□□□作

(裏銘) 先世以来未だ有らざる此の刃、百済王、世世、聖音に生を倚(よ)せたるが故に、倭王の爲め、詣(まい)り造(いた)る。後世に傳示されたし。

(注)

本稿は、二〇〇六年五月、著者福井卓造氏より鈴木勉が託されたものである。鈴木・河内共編著『復元七支刀—東アジアの鉄・象嵌・文字』の刊行が二〇〇六年十二月のことであるから、その編集段階で託されたのである。それを読んで私は「大変興味深い内容であるから、『復元七支刀』に載せないか」と提案したが、福井氏は、もう少し検討したいと辞退された。その後も一度ならず「『文化財と技術』に投稿してみないか」と声をかけたが、福井氏はこれも辞退された。そうこうしているうちに、氏は体調を崩されて、療養のため東京からご父君のふるさとである徳島の地へ移り住んだ。そして数年の後、福井氏は帰らぬ人となった。才能あふれる金石学者福井卓造氏は、珠玉の一編を残して旅立たれた。『文化財と技術』第10号に、これを公開することは、生前の福井卓造氏に対する私の感謝の気持ちである。本原稿から福井卓造氏の真摯な探究心を汲み取っていただければ幸いである。

合掌

(2020年11月、工芸文化研究所・鈴木勉)

25 森博達 1999『日本書紀の謎を解く』中央公論新社

文化財と技術 第10号

2021年9月30日 印刷

2021年10月1日 発行

編集 鈴木 勉
発行 特定非営利活動法人 工芸文化研究所
所長 鈴木 勉
発行所 特定非営利活動法人 工芸文化研究所
所長 鈴木 勉
東京都台東区根岸5-9-19 (〒110-0003)
印刷 千葉刑務所
千葉県千葉市若葉区貝塚町192 (〒264-8585)